
日本の名前における変化とジェンダー表象

—子どもの名前は本当に中性化しているか—⁽¹⁾

ウンサーシュッツ・ジャンカーラ (立正大学心理学部 准教授)

Changes in Japanese names and the representation of gender

—Are children's names really becoming gender-neutral?—

UNSER-SCHUTZ, Giancarla (*Associate Professor, Rissho University Faculty of Psychology*)

Abstract

This study examined the role of gender category marking as a salient characteristic of recent Japanese children's names. Japanese naming practices have dramatically changed, and new names have been criticized for being overly unique and difficult to read. Previous research has suggested that girls' names are particularly undergoing change, and the criticism could be read as targeting women. To confirm this, public naming data was collected from twelve Japanese municipal newsletters over a period of five years for children ($n = 2,627$) and their parents (mothers: $n = 2,264$, fathers: $n = 2,218$). Names were categorized by their orthographic and phonetic characteristics. Few parents' names were used as children's names; furthermore, compared with parents' names, children's names were more diverse in form, with girls' names now comparably as diverse as boys'. Girls' names more frequently included orthographic characteristics making them difficult; furthermore, contrary to some arguments, there was little overlap between girls' and boys' names, making it unlikely that they are becoming gender-neutral. As a result, the criticism of new names can be read as pressure to conform to gendered norms and expectations for girls' names. The continuing salience of gender marking in Japanese names as they diversify may reflect the fact that child-birth and naming occur in the largely conservative confines of marriage. These results underscore the role of naming in reinforcing gender categories, demonstrating that the analysis of naming practices can offer insight into how gender norms are reproduced and reinforced in contemporary Japanese society.

Key words : Anthroponyms, naming practices, gender

キーワード：人名、名付け習慣、ジェンダー

序 論

個人としてのアイデンティティーの構築や、名前の持ち主に関する分類的情報（民族や階級等）の表現といった形で、名前が我々の生活において多様な役割を果たす。その中でも、ジェンダーを表すことが、名前によって表現される最も一般的な分類である（Alford, 1988）。米国アラスカ州に住む先住民族・イヌピアットのように、名前がジェンダーを習慣的に表現しない文化もある（Bodenhorn, 2009）が、多くの文化では、名前が持ち主のジェンダーを表す習慣が非常に根強く残っている。アイスランドのように、ジェンダーを表すことが法律的に義務付けられている（Willson, 2009）場合もあれば、英語圏で見られるように、持ち主のジェンダーを表すことが義務付けられていないが、習慣的にジェンダーを表現するこ

とが多い場合もある。

名前を通して持ち主のジェンダーを表現する習慣のある文化社会では、生涯に渡って名前が個人のジェンダー分類に対する認識を強化する機能もある。しかし、習慣としての根深さが故に、名前のこの機能自体が認識されていないことが多い（Pilcher, 2017）。一方で、社会と文化の変遷に伴い、名前が表現する分類情報が変わることもある。多くの文化でジェンダー規範が変わっていることを受け、名前に見られるジェンダー表象が変わることも予想できる。自身の生理的な性と付けられた名前の習慣的なジェンダーが一致しない名前を使用し続ける権利が、長年続いた法廷闘争の結果として漸く認められた認められたアイスランドの少女の事件（Helgason, 2013）のように、名前に見られるジェンダー表象が社会的な論点になることも多い。

名付け習慣が大きく変わりつつ言語文化の一つとして日本が挙げられる。多くの様式の記入例として「花子」「太郎」が名前として明記されるように、典型的な名前として、女性名として～子で終わる名前、男性名として～郎で終わる名前を挙げる人が多いこと（非公式ではあるが、アンケートでも確認されている：Unser-Schutz, 2016b）。しかし、「花子」「太郎」はどちらもさほど人気ではないことも確認されている。名付け傾向における変遷が、1990年代から始まったとされている（小林康正, 2009）が、現在の人気な名前のお大半が、1990年代前のもとは大きく変わっている（Unser-Schutz, 2016a）。上記の「子」「郎」のように、名前の最後に来るいわゆる止め字の変化が見られ、以前人気だった止め字がほとんど使用されていないものが多い（本田, 2005; 小林大祐, 2001; Komori, 2002）。代わって、最近の名前がその個性や読みにくさによって特徴されているようだ（小林康正, 2009; 佐藤, 2007; 徳田, 2004）。さらに、年々の人気な名前の回転率（前年比較で上位に入った名前の出入りの割合）が上昇していることより、名付けにおける変化がさらに激しくなっているようだ（Unser-Schutz, 2016a）。

Liebersohn (2000) が論じるように、名付けは一種のファッションとして解釈することが可能である。すなわち、名付け習慣における変化は自然に起きる他にも、様々な社会的文化的な要因によっても起きる。それ故に、名付け習慣における変化は、名付けの範囲を超えるより大きな社会的な変化を示唆していると読み取れる。名前が性とジェンダーの分類化における役割の重要性、また近年の女性の生活の眩い変化を踏まえれば、女性名と男性名に同様な変化が見られるのか、という問いが自然に浮かんでくる。性役割が顕著であることが日本社会の特徴の一つとして指摘されることが多い一方（詳しい概要は Sugihara & Katsurada (2002) によってまとめられている）、近年において女性の活躍や、いわゆる典型的な人生設計図が以前と比べて丸ごと変わっている。1970年から2013年までに大学まで進学する女性が6.5%から47.6%までに上昇し、同期間中に、女性が初めて結婚する年齢が24.2歳から29.4歳、また初めて子どもを産む年齢が25.6歳から30.6歳までに上昇した（内閣府男女共同参画局, 2016）。また、ますます多くの女性が労働市場に入るのみならず、労働市場に続けて残り、出産等をきっかけで労働市場から出ても、過去と比べて短時間で再入場する傾向にある。日本の全体的な人口が減少している中、2012年から2016年の間、男性就業者数が23万人増加したのに比べ、同時期に女性就業者数が147万人増加したことが、この事実を裏付けている（内閣府男女共同参画局, 2017）。また、同時期に日本社会における男性らしい・女性らしいと感じる特徴の平準化を示唆する研究結果も見られる（Sugihara & Katsurada, 2002）。

女性の生活が変わる結果として、家族の在り方も自然と変わるが、こういった変化を受け、子どもに付ける名前を通して、ジェンダーに関する情報をどう表したいのかも、無意識にでも変わると予想できる。これまでは男性名の方が一時的な流行の影響を受けることが多かった（田中, 2014, p. 151）が、女性の生活における変化を受け、女性名の方が大きく変化しつつある予想がつく一方、名前が中性化している指摘も見られる（寿岳, 1990; 佐藤, 2007）。また、近年の新しい名前に対する社会的な評価が非常に否定的で、社会に対する悪影響が懸念されている傾向がある（小林康正, 2009; Unser-Schutz, 2016b）。もし女性名の方が、最近の流行をより受けているのであれば、近年見られる名付けに対する批判が、女性に対する批判としても解釈できるだろう。

上記の背景を踏まえ、本論では最近の名付け流行が、女性名と男性名にも見られるのかを確認するとともに、中性化が見られるのかを確認する。そのために、自治体が発行する広報誌から抽出した名付けに関するデータを活用し、近年子どもに付けられた名前の音声上・表記上の特徴を確認する。分析の結果として、男性名の方がやや多様であるものの、女性名の方が、漢字の活用法としてやや読みにくいと考えられ、近年の流行をより受けているとも考えられる。一方、女性名と男性名の重複がほとんど見られず、明らかな中性化が見られない結果となった。その代わりに、過去と比べて女性名と男性名のそれぞれの特徴が大きく変わっており、「女性らしい名前」「男性らしい名前」の在り方が変化している模様である。

なお、ジェンダーと名前に関する研究で、話題として真っ先に出るのが夫婦別姓の問題であるが、本論では意図的にいわゆる「下の名前」に焦点を当てて、分析を進める。言うまでもなく、苗字も性とジェンダーの分類化に大きな役割を果たす（Pilcher, 2017）が、苗字と比べ、名前は親が子どものために考えて選ばないといけないものであり、流行の影響をより受けやすい。家族における苗字の選別や結婚については、井戸田（2004）を参照されたい。また、日本語では「名前」が、下の名前の他にも、苗字と下の名前の組み合わせたいわゆるフルネームを表すために使用されるが、原則として本論中にある「名前」は、フルネームではなく、個人を特定するという下の名前を指すために使う。

日本における名付け習慣

言うまでもなく、日本の名付け習慣を大きく形付けるものの一つとして、日本語の表記が挙げられる（久山, 2012）。法律では、子どもに付ける名前を表記するのに、平仮名・片仮名の他に、常用漢字（2022年11月末現在：2,136字）、人名用漢字（2022年11月末現在：863字）から

選ぶ必要がある。しかし、表記そのものに制限はかかっておらず、基本的に自由に付けることが認められている。元々戸籍に読み仮名を付ける欄もない事実が、制限の有無にかかわっている。読みにくい名前が増加しているという認識が見られる今日、名前に使用できる読みを制限すべきだという声も見られ、戸籍のデジタル化に伴い、氏名の読み仮名を付ける欄が決定されている（SGO編集部, 2022）。読み仮名を付ける欄を設けることをきっかけに、名前の読みを制限することが現在法制審議会によって審議中であり、2023年2月に回答がまとめられる見込みである（竹内, 2022）。しかし、制限がかかることになっても、歴史的な読みや、意味や歴史的な用法によって動向づけられている読みが認められる可能性が高く、基本的に日本語の命名上の造語性が非常に高い。

なお、苗字は、この定めに限らず、常用漢字・人名用漢字に指名されていない漢字の使用も認められているが、そもそも、苗字は選択するものではなく、常用漢字等の指定以前に引き継がれている歴史的なものであるが故である。その点では、いわゆる下の名前が、現代の社会を反映しているのに比べ、苗字は過去の間人間関係や社会を反映しているものとして解釈できるが、こういった考察はまた別の機会に留める。

漢字を先に選び、その漢字にある読み方を意味や規定の音訓読みから選択するという命名法が可能だが、漢字の選択に重きが置かれる傾向があるものの（森岡・山口, 1985, p. 70）、名前の音声形を先に選ぶ傾向が見られる（Unser-Schutz, 2016a）。1872年の「通称実名を一つに定むる事」（太政官布告第149号）により、公的に使用可能とする名前が一つのみ限定され、さらに後の太政官布告により名前が安易に変えられなくなったことが、現代の名付け習慣を大きく形付け、以降結果的に氏名における標準化が見られる。明治安田生命が発表した1912年～2015年に付けられた最も人気な名前を分析した Unser-Schutz (2016a) によると、20世紀冒頭から男性名の回転率が比較的高かったのに比べ、女性名の回転率がそれと

比べて低く、1930年代より1980年代まで、毎年前年の上位10位に入った名前の中に次の年にも上位10位に入った名前が見られ続けた（図1）。

男性と女性に対する名付け習慣には歴史的な相違が近年に限るものではないものの（女性名の歴史的変遷について角田, 2006を参照）、20世紀の大半、女性名と男性名の見分け方が曖昧であることは、少なかったようだ。拍による名前の長さにおける相違点の他に、持ち主の性別を表す止め字も20世紀の冒頭～中旬にかけて人気で、ことに～子で終わる女性名が、長い期間人気な女性名の大半を占めていた（Komori, 2002; Unser-Schutz, 2016a）。男性名における止め字の流行は女性名ほど顕著ではなかったものの、～男や～也で終わる男性名も人気であった。推論的ではあるが、止め字が付く基礎という語幹がデフォルトとして男性的だと見られれば、男性名における止め字の役割が女性名におけるそれと比べて重要ではなかった可能性がある。現代より前、女性名が戸籍に明記されることが不規則であった（近世以前の名付け習慣について Plutschow, 1995を参照）。その結果として、男性名のみが公的な空間の一部だと言え、性別の見分け方として男性名が基準として働き、女性名がそれと区別されることが強く求められていた（麻生, 1992）。

20世紀の長い安定期間の後、女性名の回転率が上昇し、現在、男性名とはそれほど変わらないものとなっている。このことから、女性名が男性名とほぼ同様に多様になっていると予想できる。回転率の上昇に伴い、人気であった止め字の多くが流行しなくなった。その中でも～子で終わる女性名がことに人気を失い（小林大祐, 2001; Komori, 2002）、～子で終わる女性名が人気な名前にランクインすることがほとんどなくなった。その代わりに、人気の名前が漢字の用法に特徴付けられており（佐藤, 2007; 徳田, 2004）、音読みと訓読みを混ぜる重箱読み・湯桶読みや、既定の読みに準じない当て字的な読み、既存の読みの部分的な読み・変化した読みが多く見られる。

珍しい読みの使用で、名前の正確な読みを予想する情

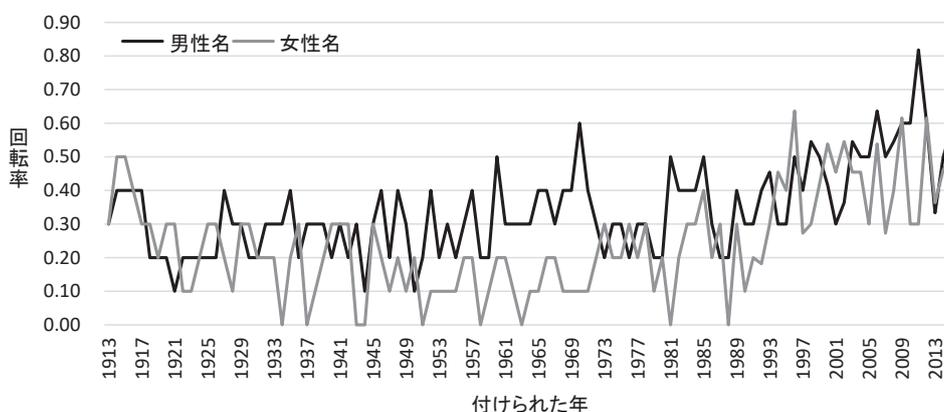


図1 女性名と男性名における回転率（1913～2013まで；Unser-Schutz, 2016a より）

表1 新しい名前の一例

名前		通常可能読み	読みの種類	実際の読み方	性別
表記	音声				
叶望	かのん	かな・う+のぞ・む	訓+訓	両漢字の訓読みの変更	女
稜玖	りく	リョウ+ク	音+音	「稜」の読みが変更	男
愛楽	あいら	アイ+ラク	音+音	「楽」の読みが省略	女
陽翔	はると	はる+かけ・る	名乗り訓+訓	「翔」の当て字的読み	男
彩空	さら	さ+そら	名乗り訓+訓	「空」の読みが省略	女
天嵩	そなた	あま+たつと・い	訓+訓	「天」の当て字読み、「崇」の読みの省略	男

注 「・」は動詞・形容詞の活用部分を表す

報が少なくなる。かどや（2010）が指摘するように、名前は元々日本語における書き言葉の最も難しい要素だが、こういった特徴より、新しい名前が過去のものとはべてなお読みにくいという仮説が成立する。表1は、本研究で活用する広報誌から抽出したデータの中から選別した、読みにくい特徴のある名前を一例として示している。男性名である「陽翔」を除き、どちらも性別を表す止め字を含めていないことに注意されたい。こういった特徴のある名前が近年の名前の過半を占めており（佐藤, 2007; 徳田, 2004; Unser-Schutz, 2017）、これまでの名付け習慣との乖離が見て取れる。

新しい名前に対する批判とジェンダー

表1に示す名前が俗に「キラキラネーム」や「DQNネーム」といったあだ名で呼ばれることがある。こういったあだ名から読み取れるように、新しい名前に対する反応が決して芳しいものではない。「キラキラネーム」という言い方が初めて新聞で見られたのは2011年（Unser-Schutz, 2016c）で、キーワード検索をトラッキングするGoogle Trendsで初めてヒットされたのは、2009年～2010年の間だったようだ（Unser-Schutz, 2016b）。新しい名前が社会的な変化を反映している見方が頻繁にある。田原（2008）によると、核家族で生まれる子どもの人数が少なくなったため、子どもに付ける名前をより大事にして付ける傾向があると言い、新しい名前が少子化を反映しているという見方を表している。新しい名前が、個性に対する社会的評価の肯定化と、公的な空間に対する意識の低減が原因だという見方もあり（小林康正, 2009）、こういった主張を支持する量的データも発表されている（Ogihara et al., 2015）。

Unser-Schutz（2016b）が論じるように、新しい名前に対する批判の多くが、子どもに対する悪影響に集中している。その中でも、新しい名前の機能性の低下および、新しい名前を読まないといけないというまわりの負担を考えていない、名付け親による考慮のなさが問題視されることが多い。こういった批判が、公的空間の変化に対する危機感、社会の共通的な価値観における変化に対する言説（山田, 2009）の一部として解釈できる。実際に、

牧野（2012）が執筆した話題の書籍『子供の名前が危ない』の題名から読み取れるように、新しい名前が子どもにとって悪影響をもたらしているとみなす人が多く、新しい名前が持ち主の社会的な悪評価にもつながると主張する声もある（伊藤等, 2016）。

名前に対する批判的な言説の一例として、読売新聞のNIE（Newspaper in Education：教育で新聞を活用する）コラムに見られる（NIE 投書編, 2015）。読売新聞のNIE投書は通常、ディベートのように、高校生が特定のテーマの賛否を論じる形となっているが、当該のコラムのタイトルは、「幸せになれる名前つけて」であった。当コラムでは、生徒による賛成と反対の意見を両方提示しているという点では、一見して中立性を保っているように見える。しかし、編集者のスタンスが、コラムの冒頭にある紹介文から読み取れる。「子どもの一生を考え、幸せになれる名前を付けるべきではないだろうか」という無難なアドバイスでコラムが終わる。しかし、前文の「あまりに奇抜で周囲の人が読めなかったり、子どもが不快に感じたりするのは残念なことだ」から、読みにくい（かもしれない）名前は幸せになれる名前ではないという評価が垣間見られる。

新しい名前に関する言説は必ずしも女性名に限定したものではないが、こういった新しい種類の名前が女性と男性とで均等に見られるのかは、話が別である。男性名の方が従来、女性名よりも多様であった傾向があり（上野, 2006）、女性名も多様になってきたことが、名付け習慣の分析に頻繁に見られる指摘である（その一例として田島, 2017が挙げられる）。また、特に批判されている変化の一部が、女性名のみ該当するのである。例えば、金原（2001）の『“子”のつく名前の女の子は頭がいい—情報社会の家族』の題名から分かるように、女性名の止め字の～子がほとんど見られなくなったことが、決してよいことと見られていない。男性名が元々多様であったことを考えると、多様性が急に増加した女性名における変化の方が顕著に見られ、批判的にされやすい可能性も否めない。

名付け習慣がこれからどう変わるのかという予測に関しても、ジェンダーが取り上げられることが多い。寿岳

(1990) がすでに1970年代に女性名と男性名に見られる漢字が収斂しているということより、名前の中性化が起こる可能性を指摘したが、近年においても佐藤(2007)のように、そういった声再びあがっている。名前によって表現されるジェンダーと、名前の持ち主の性が一致しない名前をキラキラネームの定義に埋め込まれていることもある(山西等, 2016)。当然な主張だが、不一致が起こると感じるためにはそもそも女性名と男性名の区別が明確にできることが大前提となるが、こういった定義は、その揺れに対する指摘だろう。いずれの場合でも、女性名の方が、男性名と比べて新しい名付け習慣の影響をより強く受けている、または受けていると見られているようだ。女性名の方が問題視されているのであれば、女性の社会的な変化等もかかわっていると考えた方が妥当で、状況を明確にする必要がある。

上記を踏まえ、本研究では近年の名付け習慣における変化とジェンダーの関係について、下記の3点を中心に検証を行う。

- 1) 新しい名前が、これまでの名前とはどれほど異なるのか。
- 2) 名付け習慣における流行が、女性名と男性名に同程度の影響を及ぼしているのか。
- 3) もし、女性名と男性名が同程度の影響を受けているのであれば、名前における収斂、すなわち中性化が見られるのだろうか。

方法

本研究では、全国12市町村の広報誌から名付けに関するデータを抽出し分析を試みた。名付けにおける流行を明確にするために名前の読みと表記が不可欠であるが、そういった公的な情報がほとんどない。他国では、公的な命名データを発表している場合もある。例えば、アメリカ合衆国の社会保障局は1880年以降に毎年生まれた子どもの5人以上に付けられた名前を発表しているため(Schackelford, 1998)、アメリカ合衆国の名付けにおける変化は追いやすい。実際問題として、名前の表記だけが分かっても研究することが難しいが、一方で、戸籍に読みが明記されるようになって、戸籍における個人情報等の観点から、そういった全国的な名付け情報が改めて発表されるとは考えにくい(戸籍に関してはChapman & Krogness, 2014を参照)。信頼性のある小規模なデータベースの構築でも、日本語の命名情報を収集することが非常に難しく、名前に関する研究を行う最大の難点である(久山, 2012)。

広報誌を命名研究に活用する可能性を初めて指摘したのは佐藤(2007)である。多くの自治体が、当該コミュニティの子どもや家族のための情報を提供している。その一環で、同じ町に住んでいる子どもや、生まれてき

た赤ちゃんを紹介するコラムが多い。同コミュニティのメンバーに町の子どもたちを身近な存在にし、コミュニティの充実さ、家族にとっての住みやすさをアピールする役割があり、実際に読めることが重要だからなのか、そういったコラムの多くに子どもの名前に読み仮名がついていることが多い。子ども紹介コラムには様々な種類があるが、近日、自治体で生まれてきた子どもの情報を発表する出生告知欄と、親や保護者からの手紙で、赤ちゃん・幼児をコミュニティに紹介する「我が家のアイドル」コラムがとくに有効である。出生告知欄と「我が家のアイドル」コラムに出現する子どもの年齢が必ずしも一致するとは限らないが、異なるコミュニティ間の同世代の子どもの名前を分析するのに有効だと考えられる(Unser-Schutz, 2018)。また、どちらの種類でも、対象の子どもの親に関する情報も掲載することが多いため、世代間の比較も可能である。

地域による差を抑制するため、日本の大8地方から1市町村ずつ選択して対象とした。琉球にも独自の名付け習慣があるため、上記8市町村の他に沖縄県から1市町村を追加した。選抜に関しては、広報誌における名付け情報に関する研究の結果に基づき、命名情報コラムがあるかつ各地方の人口が最大である市町村である(Unser-Schutz, 2018)。命名情報コラムのある市町村の人口規模が小さいことが多いことには注意すべきである。人口規模が大きければ大きいほど、出生者数も当然上がるが、結果として出生告知欄の掲載が現実的ではないと思われる。コミュニティの希薄さも、人口規模とかかわっていることが否めず、親からの積極的な参加が求められる投稿形式である「我が家のアイドル」コラムも困難とも予想できる。人口規模の均等性を考慮し、人口規模が極小である市町村を北海道と関東地方から1つずつ、また関東地方から中小規模の市町村を1つ追加対象とした(表2)。なお、対象市町村のデータの諸段階的分析では、新しい名前の出現頻度という点では、名付けの傾向における市町村間の差も、市町村の人口による差も見られなかった(Unser-Schutz, 2017)。

2012年1月から2016年12月まで、対象市町村の各月の広報誌を対象にした。なお、当該コラムが中止になったことにより、豊川市のデータは2015年12月までである。「我が家のアイドル」コラムの場合、同子どもの情報が複数回投稿されている場合による重複データの確認を行い、同姓同名かつ個人情報(父の氏名、母の氏名、その他の保護者の氏名、お住まいの地区、誕生日)が2点以上重複しているものが排除された。

最終的に、名前データが合計して2,627個(女性名: 1,219個、男性名: 1,408個)抽出された。得られた2,627個は、読み上の透明さ(より透明・より不透明)として分類された。より透明と見なしたものは、平仮名・片仮

表2 対象市町村とその人口情報（北南順）

地方	都道府県	市町村名	情報の種類	人口
北海道	北海道	恵庭市	我が家のアイドル	70,260 ^a
		乙部町	我が家のアイドル	3,349 ^b
東北	岩手県	一関市	我が家のアイドル	110,019 ^c
関東	茨城県	古河市	我が家のアイドル	141,166 ^c
	埼玉県	伊奈町	我が家のアイドル	45,251 ^d
中部	東京都	大島町	出生告知欄	7,158 ^b
	愛知県	豊川市	我が家のアイドル	184,399 ^c
近畿	京都府	京丹後市	我が家のアイドル	52,187 ^c
中国	岡山県	早島町	出生告知欄	12,641 ^c
四国	高知県	土佐町	我が家のアイドル	3,638 ^c
九州	熊本県	天草市	我が家のアイドル	74,922 ^b
沖縄	沖縄県	宮古島市	我が家のアイドル	55,519 ^a

注 どれも右記の時点での人口 - ^a: 2022年11月30日、^b: 2022年10月31日、^c: 2022年11月1日、^d: 2022年12月1日、^e: 2022年9月30日

名を使用したものや、漢字が通常認められた読みを変えず・混ぜず（重箱読み・湯桶読みでない）したもので、より読みやすいと考えられるものである。より不透明と見なしたものは、音読みと訓読みを混ぜたものや、当て字、通常の読みを部分的に使用しているもしくは変えているもので、より読みにくいと考えられるものである。

名付けの変遷を把握するために、対象の子どもの親の名前情報も抽出対象とした。子どもの名前と同様に、兄弟の投稿などによる重複的なものが除外され、最終的に対象の子どもの母にあたる女性名、対象の子どもの父にあたる男性名がそれぞれ2,264個・2,218個得られた。なお、世代との区別のため、以降、子どもの名前を「女子名・男子名」、親の名前を「母名・父名」とする。

検討事項として、下記の4点を中心に分析を進めた。

1. 女子名と男子名の共通点・相違点を確認するために、女子名の実際の読み方が異なる名前（「音声形」）・実際の書き方が異なる名前（以降「表記形」）・実際の読み方と表記の組合せによる名前（以降「音声・表記の組合せ」）がそれぞれ異なる数と出現頻度を比較して分析した。
2. 新しい名前の特徴だとされている読みにくさが、男女ともに同様に見られるのかを確認するために、女子名と男子名の表記上の読みやすさを比較して分析した。
3. 女子名と男子名の表記上の共通点・相違点を明らかにするために、子どもの名前に見られる漢字の数と出現頻度を確認し、分析した。
4. 子ども世代との隔たりを明らかにするため、親世代の名前の表記形、名前に使用される漢字の異なる数と出現頻度を確認し、分析した。

結果

1) 音声形・表記形・音声と表記の組合せが異なる名前の数と出現頻度

抽出できた2,627個の子どもの名前のうち、音声上異なるものが939個であった。そのうち、374個（39.83%）が女子名のみとして、496個（52.82%）が男子名のみとして使用された。残り69個（7.35%）が女子名とも男子名とも使用された「中性的な名前」であった。同じ音声上の名前が繰り返し見られる平均出現頻度が2.80回であり、男子名としてのみ使用されたものは、平均出現頻度が最も低く、女子名としてのみ活用されたものが最も高かった（3.91回）。男子名で一度のみ見られた音声上の名前（351個、音声形が異なる名前の62.12%）が女子名のそれ（225, 50.79%）よりも有意に多かったものの、その効果量が低かった（ $\chi^2(1, N = 1,008) = 12.57, p < .001, V = .114$ ）。また、中性的な名前は、全出現数では有意に女子名としてより頻繁に使われた（女子名の22.15%対男子名の16.19%： $\chi^2(1, N = 2,627) = 14.70, p < .001, V = .076$ ）。

表記形が異なる名前が2,037個得られ、そのうち887個（43.54%）は女子名のみ、1,110個（54.59%）は男子名のみとして使用された。残り40個（2.00%）は女子名としても男子名として使用された。全体的な平均出現頻度は1.29回で、男子名のみとして使用された名前の平均出現頻度は最も低く（1.21回）、女子名として使用された場合の女子名・男子名とも使われた平均出現頻度が最も高かった（2.20回）。男子名で1回のみ使用された名前（753個、異なる表記形の81.23%）は女子名とで1回のみ使用された名前（753個、異なる表記形の81.23%）よりも有意に高かったが、効果量は低かった（ $\chi^2(1, N = 2,077) = 10.77, p = .001, V = .07$ ）。女子名としても男子名としても使用された名前は、有意に男子名よりも（4.87%）女

表3 子どもの名前の性別分布（音声形・表記形・音声と表記による組合せ）

性別	音声形の名前			表記形の名前			音声と表記による組合せ		
	個数	延べ数	頻出度	個数	延べ数	頻出度	個数	延べ数	頻出度
女子名									
全女子名	443	1,219	2.75	927	1,219	1.31	981	1,219	1.24
女子名としてのみ使用された名前 ^o	374	949	2.54	887	1,131	1.28	953	1,156	1.21
男子名									
全男子名	565	1,408	2.49	1,150	1,408	1.22	1,202	1,408	1.17
男子名としてのみ使用された名前	496	1,180	2.38	1,110	1,338	1.21	1,174	1,353	1.15
女子名・男子名のどちらとしても使用された名前									
女子に付けられた場合		270	3.91		88	2.20		63	2.25
男子に付けられた場合	69	228	3.30	40	70	1.75	28	55	1.96
合計		498	7.22		158	3.95		118	4.21
子どもの名前（総計）	939	2,627	2.80	2,037	2,627	1.29	2,155	2,627	1.22

子名として（全回数の7.22%）より頻繁に使われた（ $\chi^2(1, N = 2,627) = 5.45, p = 0.02, V = .047$ ）。

音声と表記を組み合わせた形の異なる名前は2,155個で、そのうち953個（44.22%）は女子名のみ、1,174個（54.45%）は男子名のみとして使用された。残り28個（1.30%）は女子名としても男子名としても使用された。音声形、表記形を見たときと同様に、音声と表記の組合せが異なる名前の平均出現頻度は男子名（1.15回）が最も低く、女子名として使用された場合の中性的な名前（2.25回）が最も高かった。1回のみ見られた男子名（1,069個、音声と表記の組合せが異なる名前の88.94%）が1回のみ見られた女子名（833個、同84.91%）よりも僅かに有意に多かった（ $\chi^2(1, N = 2,183) = 7.44, p < .064, V = .06$ ）。中性的な音声・表記の組合せには、男女による有意な差が見られなかった（ $\chi^2(1, N = 2,627) = 7.44, p = .144, V = .06$ ）。

2) 子どもの名前の音声的透明度とその読みにくさ

音声と表記の組合せが異なる2,155個の名前のうち、1,283個（59.54%）の読みがより不透明、つまり初見で読

み方が明らかではないと考えられ、813個（37.73%）が、読みがより透明であった。残り59個が仮名表記であったため、音声的な曖昧さが完全にないものであった（表4）。読みがより透明の名前の頻出度が1.29回で読みがより不透明な名前よりも高かったが、有意な差ではなかった。女子名で読みが不透明なもの（67.48%）が、男子名のそれら（52.66%）と比べて有意に多かったが、効果量が小さかった（ $\chi^2(1, N = 2,183) = 48.55, p < .001, V = .15$ ）。読みが不透明な名前の頻出度は、女子名（1.18回）・男子名とも（1.15回）に低かった。仮名のみで表記された名前は全体的に少なかったが、男子名では延べ数3個のみ（男子名の0.21%）、女子名では延べ数76個（女子名の6.23%）で、女子名には有意に多かった（ $\chi^2(1, N = 2,627) = 79.17, p < .001, V = .176$ ）。

3) 女子名・男子名に使用された漢字の数と頻出度

子どもの名前に総571字の異なる漢字が見られ、そのうち178字（31.17%）が女子名と男子名のどちらにも使用された（表5）。女子名と男子名のどちらにも使用された漢字は、女子名に使われた漢字の大半（75.88%）で、男

表4 名前の音声的透明度（読みやすさ）による性別分布

性別	読みがより不透明			読みがより透明			仮名のみで表記		
	個数	延べ数	頻出度	個数	延べ数	頻出度	個数	延べ数	頻出度
女子名									
全女子名	662	778	1.18	263	365	1.39	56	76	1.36
女子名としてのみ使用された名前 ^o	650	756	1.16	247	324	1.31	56	76	1.36
男子名									
全男子名	633	725	1.15	566	680	1.20	3	3	1.00
男子名としてのみ使用された名前	621	707	1.14	550	643	1.17	3	3	1.00
女子名・男子名のどちらとしても使用された名前									
女子に付けられた場合		22	1.83		41	2.56			
男子に付けられた場合	12	18	1.50	16	37	2.31	-	-	-
合計		40	3.33		78	4.88			
子どもの名前（総計）	1,283	1,503	1.17	813	1,045	1.29	59	79	1.34

子名 (52.69%) に使われた数よりも有意に高かった ($\chi^2(1, N = 5,239) = 302.72, p < .001, V = .241$)。残り393字のうち、302字 (52.9%) が男子名のみで使用され、91字 (15.94%) が女子名のみで使用された。女子名のみで使用された漢字の数が、男子名のそれよりも有意に低かった ($\chi^2(1, N = 749) = 57.33, p < .001, V = .279$)。女子名のみで使用された漢字の頻出度が男子名のそれよりも高く (6.58回対4.32回)、女子名・男子名のどちらにも使用された漢字の頻出度は、女子名に使用された場合の方が高かった (10.58回対8.16回)。

4) 子ども世代と親世代の名前における共通点・相違点

親の名前が全部で4,482個 (母名: 2,264個、父名: 2,218個) が抽出できた (表6)。そのうち、2,545個が異なる表記形で、各名前が約1.76回見られた。母名のみとして使用された名前、父名のみとして使用された名前、母名・父名のどちらとしても使用された名前がそれぞれ1,051個・1,467個・27個であった。母名の平均出現頻度は2.10回で、父名の1.48回よりも高かった。父名のみとして使用された、かつ1回のみ見られた名前 (1,146個・異なる父名の76.71%) が、母名のみとして使用された、かつ1回のみ見られた名前 (6.79個・異なる母名の62.99%) よりも有意に多かった ($\chi^2(1, N = 2,572) = 56.53, p < .001, V = .149$)。

母名のみとして使用された1,051個の表記形が異なる名前のうち、97個 (9.22%)・12個 (1.14%) が、それぞれ

女子名・男子名としても使用され、大半は子どもの名前として使用されなかった (949個・90.29%) (表7)。同様に、父名のみとして使用された1,467個の表記形が異なる名前のうち、8個 (0.05%)・108個 (7.36%) が、それぞれ女子名・男子名としても使用され、大半は子どもの名前として使用されなかった (1,355個・92.37%)。親の名前として見られた名前、女子名・男子名のどちらとしても使用された名前が15個で、女子名・男子名のどちらとしても使用された名前の37.5%を占めた。その15個のうち、9個が母名のみ、4個が父名のみとして使用されたもので、母名・父名のどちらとしても使用された名前が2個に留まった。

親の名前には全549字の異なる漢字が見られ、そのうち177字 (32.24%) が母名・父名のどちらにも使用された。母名・父名のどちらにも使用された漢字が母名に見られた漢字の大半 (66.08%) を占め、父名に見られた場合 (58.89%) よりも有意に高かった。ただし、その効果量が低かった ($\chi^2(1, N = 9,160) = 49.87, p < .001, V = .074$)。母名にのみ使用された漢字が152字 (全漢字の27.69%) で、効果量が低かったものの、父名の220字 (40.07%) よりも有意に低かった ($\chi^2(1, N = 726) = 5.75, p = .017, V = .092$)。

母名にのみ使用された152字のうち、84字 (55.26%)・66字 (43.42%) がそれぞれ女子名・男子名にも使用され、57字 (37.5%) が子ども名には見られなかった (表9)。父名にのみ使用された220字のうち、11字 (5.00%)・120

表5 子ども世代の名前に使用された漢字の性別分布

性別	女子名・男子名のどちらにも使用された漢字			該当の性別にのみ使用された漢字			子どもの名前に使用された漢字の総数		
	個数	延べ数	頻出度	個数	延べ数	頻出度	個数	延べ数	頻出度
女子	178	1,884	10.58	91	599	6.58	269	2,483	9.23
男子		1,452	8.16	302	1,304	4.32	480	2,756	5.74
							総計	5,239	9.18

表6 親の異なる表記形の名前

性別	個数	表記形	
		延べ数	平均出現頻度
母名			
全母名	1,078	2,264	2.10
母名としてのみ使用された名前	1,051	2,199	2.09
父名			
全父名	1,494	2,218	1.48
父名としてのみ使用された名前	1,467	2,170	1.48
母名・父名のどちらとしても使用された名前			
母名		65	2.41
父名	27	48	1.78
合計		113	4.18
総計	2,545	4,482	1.76

表7 親の表記形の名前の子ども名としての使用状況

親の名前	現在子どもの名前として使用されているか否か								
	女子名		男子名		見られない		合計		
母名									
異なる名前	105	(97)	17	(12)	965	(949)	1,078	(1,051)	
延べ数	母名として	249	(228)	32	(20)	2,044	(1,966)	2,264	(2,199)
	子どもの名前として	152	(142)	21	(15)	-	-		
父名									
異なる名前	16	(8)	113	(108)	1,371	(1,355)	1,494	(1,467)	
延べ数	父名として	23	(13)	312	(303)	1,891	(1,860)	2,218	(2,170)
	子どもの名前として	25	(15)	182	(176)	-	-		
母名・父名のどちらとしても使用	2				希, 千尋				
母名として使用	7				葵, 瑞希, 茜, 渚, 優希, 遥				
父名として使用	4				翼, 晴, 悠, 陽				

注 () 内の数は、母名・父名のどちらとしても使用された名前を除外した数を表している

表8 親の名前に使用された漢字の性別分布

性別	母名・父子名のどちらにも使用された漢字			該当の性別にのみ使用された漢字			親の名前に使用された漢字の総数			
	個数	延べ数	平均出現頻度	個数	延べ数	平均出現頻度	個数	延べ数	平均出現頻度	
母名	177	3,278	18.52	152	1,683	11.07	329	4,961	15.08	
父名		2,473	13.97	220	1,726	7.85	397	4,199	10.58	
							総計	549	9,160	16.68

表9 親の名前に使用された漢字の子ども名における使用状況

親の名前	現在子どもの名前中使用されているか否か								
	女子名		男子名		見られない		合計		
母名における漢字									
異なる漢字	173	(84)	195	(66)	92	(57)	329	(152)	
延べ数	母名に	4,434	(1,499)	2,861	(486)	271	(164)	4,961	(1,683)
	子どもの名前に	2,176	(1,130)	1,404	(289)	-	-		
父名における漢字									
異なる名前	100	(11)	249	(120)	130	(95)	397	(220)	
延べ数	父名に	1,475	(112)	3,761	(1,477)	386	(243)	4,199	(1,726)
	子どもの名前に	1,076	(30)	1,941	(826)	-	-	-	-
母名・父名のどちらにも使用	12		渚, 澄, 滯, 留, 万, 水, 珀, 茜, 伊, 小, 七, 百						
母名に使用	8		泉, 知, 麻, 矢, 静, 世, 宇, 紘						
父名に使用	18	喜, 紀, 久, 暁, 寿, 秋, 純, 静, 泉, 知, 二, 麻, 礼, 眞, 矢, 世, 永, 尋							

注 () 内の数は、母名・父名のどちらにも見られた漢字を除外した数を表している

字 (54.54) がそれぞれ女子名・男子名にも使用され、95字 (43.18%) が子ども名には見られなかった。また、親の名前に使用された漢字のうち、女子名・男子名のどちらにも使用された漢字が38字で、女子名・男子名のどちらにも使用された漢字の21.35%を占めた。しかし、その38字のうち、18字のみが母名・父名のどちらにも使用された、12字 (31.58%) が母名、8字 (21.05%) が父名にのみ使用された。

考察

1) 近年の子ども名前は、親世代とはどう異なるのか
上記の結果が、音声形・名前に使用された漢字のどちらに関しても、男女ともに子ども世代と親世代とでは名前が大きく変わっていることを明らかに示す。これにより近年の名付け傾向が過去と比べて変化していることが確認できた。また、子どもに名前を付けるという親自身が、自分や同世代の名前をそのままに、同世代の名前をそのままに使用することも、手本としても参考にしてい

ないことを強く示唆している。その代わりに、これまで見られなかった方法や資料・リソースを参考にしていることも読み取れるだろう。この点は女子名にも男子名にも言えることだが、母名の頻出度よりも女子名の頻出度が、父名と男子名と比べても大幅に下降していることを踏まえ（男子名：0.26点減、女子名：0.79点減）、女子名の方が、絶対的な変化量が大きいようだ。Unser-Schutz (2016a) は、女子名よりも男子名の方が未だに多様であるものの、近年、女子名が受けてきた変化の規模がより大きいことを示したが、本研究でも同様な結果となっている。

2) 最近の流行が、子どもの性別に関係なく同様に子どもの名前に見られるのか

性別によって、子どもの名前に顕著な差があるのかを確認するために、2点評価する必要がある。第一は、新しい名前が個性的になっているという指摘を踏まえ、女子名と男子名が同様に個性的であるのか、つまり、多様な名前が同程度見られるのかである。第二は、新しい名前が読みにくいという特徴があるとされていることを踏まえ、女子名と男子名が同程度読みにくいのかである。

前者に関しては、男子名はどのデータ（音声形、表記形、音声と表記の組合せ）においても女子名よりも多様な名が見られた。また、男子名により多くの異なる漢字も使用されており、男子名にのみ使用されている漢字がより多かった。その点では、男子名の方が、女子名よりも音声的に表記的に女子名よりも個性的である可能性を示している。その一方、歴史的に見る男性名、女性名が同程度個性的だったわけではないため、変化前と変化後の距離が異なる。親世代でも、父名の方が母名よりも多様であったことを考慮すると、《男性名が元々個性的であり、今も個性的である》のに対し、《女性名がさほど個性的ではなかったが、今は男性名程個性的になってきた》と言えるだろう。

一方、子どもの名前を見たときに、異なる音声形の方が異なる表記形よりも少なかったことより、同じ音声形の名前が、異なる表記で繰り返し見られることが分かる。したがって、多くの名前が表記上個性的に見えても、音声上そうとは限らない。音声と表記を組み合わせた名前の頻出度が低いことも、この事実を反映しており、名前における個性を作り出すために表記に重きが置かれる主張を裏付ける証拠だろう（森岡・山口, 1985, p. 70）。

上記は、評価すべき第2点—新しい名前における読みにくさと、結果的に新しい名前における漢字の用法—が、近年の名付け習慣における変化を評価するための最も肝心なデータであることを示すだろう。その点においても、男子名の方がやや不透明でありながら、それほど大きな差が見られず、全体的に、女子名も男子名も、読みにく

いものが多く見られることが明らかである。

3) 子どもの名前は、中性化しているのか

音声形に関しても表記形に関しても、女子名と男子名の重複がほとんど見られないことが顕著であり、明治安田生命の発表した命名データで確認できた傾向と同様である（Unser-Schutz, 2016a）。本データで見られた女子名としても男子名としても使用された名前がそもそも比較的稀であったが、Lieberson et al. (2000) によると、ある名前が中性的だと言えるためには、女性にも男性にも使われるだけではなく、男女ともに一定の割合以上を占めないといけないという。その点を踏まえると、明確な中性化が起きているとは言い難い状況である。名前が中性的になっていなくても、音声と表記の組合せの名前の頻出度が低いことより、性別の区別が難しいという、性別不明瞭な名前が増えていると考えられる。しかし、名前に使われている漢字により、性別を区別することもあることより、こういったことが少ないと思われる。女子名・男子名のどちらにも使われる漢字が多いものの、それらが女子名により見られる、また男子名にのみ使われる漢字がより多いことより、女子名と男子名が表記的に同様に見えるとは考え難く、音声形が分からなくても、性別を見分けられる可能性が高いだろう。佐藤 (2007) が指摘した名前における中性化も、寿岳 (1990) が予想した性別にかかわらず漢字の収斂も、どちらも不支持の結果となった。また、女性名が男性名よりも個性的ではない傾向（上野, 2006）が、変わったことも示唆される。

興味深いことに、他国においても類似した予想と、それに反するデータ上の揺れが見られる。アメリカ合衆国では、性別不明瞭な名前が増加しているようだが、実際の名付けデータを分析すると、そういった名前が主に女性に付けられる傾向がある（Lieberson et al., 2000）。そのため、一見して性別不明瞭に感じられる名前でも、視野を拡大すれば、むしろ「女性的」だと言えるだろう。しかし、男性名が徐々に女性名として使われるようになっていく傾向が見られるアメリカ合衆国の名付け傾向と異なり、本研究で取り扱ったデータを考察する限り、父名や、父名に使われた漢字が女子名として・女子名にほとんど見られず、むしろ、母名や、母名に使われた漢字が男子名として・男子名に見られることがより多い。女性名が徐々に男性名として使われるようになっていとは言えないが、少なくとも女性名のパーツをなす漢字が、男性名にも使用されていることは事実である。近年において、「男性らしさの女性化 (feminization of masculinity)」が、若者文化やファッションに見られることが Iida (2006) 等に指摘されており、名付けの変更との類似点が見られる。

全体として、名前における性別による区別がまだ頻繁に見られ、日本の名付け習慣における顕著な特徴の一つであるのみならず、持ち主の (Pilcher (2017) の指摘通り、生まれつきの身体的パーツに沿った) 性別を表現する習慣の根深さが読み取れる。しかし、社会の変更に伴い、性別の表し方が変わることも、その変更の在り方も、社会によっても異なることが、結果的に読み取れる。

名付け習慣は、社会の中に存在し、社会の中で次世代へ継承される・されぬがために、名付け習慣における変化が、社会的な変化の表しだと言い切ってもよいだろう。名前、ことに女性名の個性が増しているアメリカ合衆国では、こういった変化が個人主義の普及と関連しているようだ (Twenge et al., 2010)。同様な傾向を示すデータも報告されており (Ogihara et al., 2015)、加えて、公的空間に対する意識の変化が、日本における個性的な名前の増加原因の一つとして指摘されている (小林康正, 2009)。また、これまでは女性名が、男性名ほど重要に思われていなかったがために、女性名の方が多様性に乏しいと推測されてきた (Taylor & Taylor, 1995) が、現在増加している女性名の多様化が、日本社会におけるジェンダーの捉え方の変化を示しているとも予想できる。また女性が、伝統と継承を守る役割を持ってきたことが多い (Morris-Suzuki, 1998)。このことは、従来ならば「伝統的」とされる、規範的な名前を女性に付けることから始まると考えられるが、名付けはもうその役割を果たしていないようだ。

一方で、英語圏の状況から見受けられるように、女性名が以前より個性的・多様的になっていることは、必ずしも女性名に重きが置かれているとは言いきれない。日本と異なり、英語圏における女性名は元々男性名よりも多様に豊富であった。しかし、これは主に男性名と女性名の選択の仕方による結果である。すなわち、女性名は主に美的な理由 (きれいな響き等) より選ばれる傾向があったのに対し、男性名が、家族との絆の構築に大きな役割を果たすものだと考えられていたため、先祖等の名前とのかかわりが重要になり、同家族内で同じ名前が繰り返し使われる等という付け方が頻繁に見られた (Rossi, 1965)。言い換えれば、女性が社会的地位・権力がなかったからこそ、女性名の方が多様であった。従って、日本で見られる多様性の増加が、女性の社会的立ち位置における改善の指標とは簡単には解釈できない。

また、女性名の方が音声的に不透明であったことが、女性名の方が無意識にでも男性名より批判の対象になっている可能性がある。俗にいうキラキラネームが読みにくい名前であることが多く、女性名の方が、読みにくいものがやや多いことより、新しい名前に対する批判で取り上げられている名前が、性別に触れていなくても特徴

からして女性名である可能性が高く、隠れたジェンダー批判として読み取れる可能性がある。従って、新しい名前に対する批判の影響が、女性に対してより強いとも考えられ、規範的なジェンダー表象を守る名付け習慣への強化にも働きかけるものとして解釈できる。

とはいえ、キラキラネームと言われる男性名も多く見られ、性別を表す名前がまだ主流である。よって、新しい名付け習慣が、ジェンダー規範を破壊するものとは断定できない。子どもの生誕と名付けにかかわる諸事情が、名付けにおける規範を補強している可能性もある。他国でも見られるように、日本における離婚率が徐々に上がっているようだが、日本で生まれる子どもの大半が、結婚した夫婦の間に生まれ、「できちゃった結婚」の高い割合からも読み取れるように、結婚という制度化で子どもを産むことに対する社会的なプレッシャーが高い (Tokuhiko, 2011)。その結果として、子どもに名前を付けるのは、結婚という保守的な社会的制度の中で起こることである。日本の家族の在り方が多様になってきているとはいえ、子どもの生誕を取り巻く社会的事情の影響が、名前ジェンダー規範の再現にもかかわっているだろう。

結 論

一見すると、近年の名前がこれほど多様になっている中、名付けにおけるジェンダー表象がそれほど強いことに、驚くところがあるだろう。しかし、性別カテゴリーが、他の社会的な価値観と比べてそれだけ深く、潜在的でありながら、個人主義的価値観の浅薄さも示している可能性がある。名前に使用できる漢字が増加しているため、個性的な名前の増加が、創造性を許容する制度的変化を反映しているとも言えそうだ。1990年から2015年まで、名前に使える漢字が826字増加しており、世代間の差が、こういった変化ともかかわっているだろう。個人主義的な理由より、名前に使用できる漢字の増加が望まれていたという指摘が見られそうだが、これは多少単純すぎる説明だろう。実際は、名前に使用できる漢字の制限は、戸籍の管理のしやすさを意識し、元々技術的な理由が大きかったが、近年の字術の進展により、その必要性が以前と比べて低いのだろう (円満字, 2005)。これまで技術の面も含めて、様々な理由から戸籍において名前の読みが記載されていなかったが、戸籍の法律が変わり、名前の読みも記録されることを踏まえるため、こういった《技術的な事情》で名付け習慣がまた変化する可能性があるだろう。

名付け習慣における変化を完全に説明できる「総仮説」はおそらく存在しないが、ジェンダー表象が日本の名前の継続的な特徴の一つであることが、規範的な二元化を支持する無意識な社会的権力が読み取れる。本研究の

範囲を超えてしまったが、名前に見られるジェンダー表象を覗き見するために、漢字そのものの意味分類的な特徴があるのかについて、さらに研究する必要があるだろう。例えば、表9に現れた女子名・男子名のどちらにも使われた漢字を見ると、自然現象を表すものが多い（暁：あかつき・ギョウ、秋：あき・シユウ、泉：いずみ・セン）。名前に見られる漢字の意味的分類がすでに麻生（1992）によって見られたが、社会的な変化に伴い、親が子どもに託す希望や志、またそれらを表す名付けの漢字も変わってきたと予想できる。漢字に見られる意味分類と性別のかかわりを分析すれば、名前におけるジェンダー表象の在り方に対する理解がさらに深まるだろう。

註

1) 本論文は筆者が日本語ジェンダー学会の2019年度大会（7月開催・発表題名：「近年の名前にはジェンダーがどう反映されているのか？」）にて発表したものに基づいて議論を展開されたものである。

参考文献

- Alford, R. D. (1988). *Naming and identity: A cross-cultural study of personal naming practices*. HRAF Press.
- 麻生 健人 (1992). 女性名の文字が表す意味：短大生の名前にみる命名の心理 松山東雲短期大学研究論集, 23, 51-64.
- Bodenhorn, B. (2009). Calling into being: Naming and speaking names on Alaska's North Slope. G. vom Bruck & B. Bodenhorn (Eds.), *An anthropology of names and naming* (pp. 226-250). Cambridge University Press.
- Chapman, D., & Krogness, K. J. (2014). *Japan's household registration system and citizenship: Koseki, identification and documentation*. Routledge.
- 円満字 二郎 (2005). 人名用漢字の戦後史 岩波書店
- Helgason, G. (2013, January 31). Icelandic teen wins right to use her given name. *The Huffington Post*. http://www.huffingtonpost.com/2013/01/31/blaer-bjarkardottir-icel_n_2589657.html
- 久山 健太 (2012). S. Lieberson の個人名研究と日本における発展可能性 年報人間科学, 33, 1-14. <https://doi.org/10.18910/4050>
- 本田 明子 (2005). 赤ちゃんの名付け 日本語学, 24(12), 54-62.
- Iida, Y. (2006). Beyond the 'feminization of masculinity': Transforming patriarchy with the 'feminine' in contemporary Japanese youth culture. *Inter-Asia Cultural Studies*, 6(1), 56-74. <https://doi.org/10.1080/1462394042000326905>
- 伊藤 資浩・宮崎 由樹・河原 純一郎 (2016). 奇抜な名前が社会的評価の印象形成に及ぼす影響 日本認知心理学会発表論文集, 14, 140. https://doi.org/10.14875/cogpsy.2016.0_140
- 井戸田 博史 (2004). 夫婦の氏を考える 世界思想社
- 寿岳 章子 (1990). 日本人の名前 大修館書店
- かどや ひでのり (2010). 日本の識字運動再考 かどや ひでのり・あべ やすし (編) 識字の社会言語学 (pp. 25-82) 生活書院
- 金原 克範 (2001). “子” のつく名前の女の子は頭がいい—情報社会の家族 洋泉社
- 小林大祐 (2001). 名前の社会学的分析に向けて：漢字がつくる同一性のなかの差異 評論・社会科学, 65, 23-41. <https://doi.org/10.14988/pa.2017.0000002169>
- 小林 康正 (2009). 名づけの世相史「個性的な名前」をフィールドワーク 風響社
- Komori, Y. (2002). Trends in Japanese first names in the twentieth century: A comparative study. *International Christian University Publications 3-A: Asian Cultural Studies*, 28, 67-82. <http://doi.org/10.34577/00001623>
- Lieberson, S. (2000). *A matter of taste: How names, fashions, and culture change*. Yale University Press.
- Lieberson, S., Dumais, S., & Baumann, S. (2000). The instability of androgynous names: The symbolic maintenance of gender boundaries. *American Journal of Sociology*, 105(5), 1249-1287. <https://doi.org/10.1086/210431>
- 牧野 恭仁雄 (2012). 子供の名前が危ない ベストセラーズ
- 森岡 健二・山口 仲美 (1985). 命名の言語学 東海大学出版会
- Morris-Suzuki, T. (1998). *Re-inventing Japan: Time, space, nation*. M.E. Sharpe, Inc.
- 内閣府男女共同参画局 (2016). 男女共同参画白書 平成28年版 内閣府男女共同参画局 Retrieved October 25, 2022 from http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h28/zentai/index.html
- 内閣府男女共同参画局 (2017). 男女共同参画白書 平成29年版 内閣府男女共同参画局 Retrieved October 25, 2022 from http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h29/zentai/index.html
- NIE 投書編 (2015). [気流] 私はこう考える 読売新聞 2月28朝刊, 12.
- Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., & Uchida, Y. (2015). Are common names becoming less

- common? The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, **6**, 1490. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2015.01490>
- Pilcher, J. (2017). Names and “doing gender”: How forenames and surnames contribute to gender identities, difference, and inequalities. *Sex Roles*, **77** (11/12), 812-822. <https://doi.org/10.1007/s11199-017-0805-4>
- Plutschow, H. (1995). *Japan's name culture: The significance of names in a religious, political & social context*. Routledge.
- Rossi, A. S. (1965). Naming children in middle-class families. *American Sociological Review*, **30**(4), 499-513. <https://doi.org/10.2307/2091340>
- 佐藤 稔 (2007). 読みにくい名前はなぜ増えたか 吉川弘文館
- Schackelford, M. W. (1998). Schackelford, actuarial note #139, name distributions in the Social Security area, August 1997. *Social Security*. <https://www.ssa.gov/OACT/babynames/limits.html>
- SGO 編集部 (2022). キラキラネームの現状とは？実際に起きた騒動や結末も紹介 資産形成ゴールドオンライン Retrieved October 25, 2022 from <https://gentosha-go.com/articles/-/43229>
- Sugihara, Y., & Katsurada, E. (2002). Gender role development in Japanese culture: Diminishing gender role differences in contemporary society. *Sex Roles*, **47**(9/10), 443-452. <https://doi.org/10.1023/A:1021648426787>
- 田原 広史 (2008). 人名 宮地 裕・甲斐 睦朗 (編)「日本語学」特集テーマ別ファイル 意味〈2〉命名/言語感覚 (pp. 40-48). 明治書院
- 竹内 豊 (2022). 「光宙」(ピカチュウ)も認められる！？～戸籍氏名に「読み仮名」が付く可能性も Yahoo! ニュース Retrieved October 25, 2022 from <https://news.yahoo.co.jp/byline/takeuchiyutaka/20220518-00296550>
- 田島 優 (2017). 「あて字」の日本語史 風媒社
- 田中 宣一 (2014). 名づけの民俗学 吉川弘文館
- Taylor, I., & Taylor, M. M. (1995). *Writing and literacy in Chinese, Korean and Japanese*. John Benjamins.
- 徳田 克己 (2004). 名づけの心理 2 : 読みにくい名前の分析 日本教育心理学会総会発表論文集, **46**, 623. https://doi.org/10.20587/pamjaep.46.0_623
- Tokuhiro, Y. (2011). *Marriage in contemporary Japan*. Routledge.
- 角田 文衛 (2006). 日本の女性名一歴史的展望 国書刊行会
- Twenge, J. M., Abebe, E. M., & Campbell, W. K. (2010). Fitting in or standing out: Trends in American parents' choices for children's names, 1880-2007. *Social Psychological and Personality Science*, **1** (1), 19-25. <https://doi.org/10.1177/1948550609349515>
- 上野 和男 (2006). 名前と社会をめぐる基本的諸問題 上野 和男・森 謙二 (編) 名前と社会一名づけの家族史 (pp. 3-27) 早稲田大学出版部
- Unser-Schutz, G. (2016a). 現代日本における名付け事情とその変遷 - ジェンダーという側面から 立正大学心理学研究所紀要, **14**, 88-99.
- Unser-Schutz, G. (2016b). Naming names: Talking about new Japanese naming practices. *electronic journal of contemporary japanese studies*, **16**(3), np.
- Unser-Schutz, G. (2016c, January 7-9). *Japanese society in transition: Observations from recent naming practices* [Conference presentation]. Japanese Studies Association, Honolulu. <http://www.japanstudies.org/archive-2016-jsa-conference-program.html>
- Unser-Schutz, G. (2017). Evaluating contradictory hypotheses on the effects of regional differences in the selection of novel naming patterns in Japan. *Orientaliska Studier*, **147**, 55-74.
- Unser-Schutz, G. (2018). 資料として日本の名付けに関する研究に広報誌を用いる可能性について 立正大学心理学研究年報, **9**, 23-35.
- Willson, K. (2009). Name law and gender in Iceland. *UCLA: Center for the Study of Women Update Newsletter*, June, 8-11. <https://escholarship.org/uc/item/0ds6glhf>
- 山田 真茂留 (2009). 「普通」という希望 青弓社
- 山西 良典・大泉 順平・西原 陽子・福本 淳一 (2016). 人名の言語的特徴の分析に基づくキラキラネーム判定 日本感性工学会論文誌, **15**(1), 31-37. <https://doi.org/10.5057/jjske.TJSKE-D-15-00030>